

# 太宰治「葉桜と魔笛」の一考察

——「老夫人」の宿病——

山 田 佳 奈

## 序

太宰治「葉桜と魔笛」は、昭和十四（一九三九）年六月一日発行の「若草」第十五卷第六号の「小説」欄に発表された。その後『皮膚と心』に収録、創作集『女性』に再録された。脱稿時期は、山内祥史氏によって、昭和十四年四月上旬と推定されている。

当時三十一歳の太宰は、人生の転換期にあつた。その要因は、この年一月に石原美知子と結婚したことにある。所帯を持つ自覚からか、太宰はより一層執筆に精を出す。一月十日井伏鱒二宛書簡には、次のような言葉を記している。

私もきつといい作家になります。お名をはづかしめないやう、高い精進いたします。

くるしいこともございました。

（中略）

仕事します。

遊びませぬ。

うんと永生きして、世の人たちからも、立派な男と言はれるやう、忍んで忍んで努力いたします。

この言葉に反することなく、同年二月には「富嶽百景」を「文体」に、四月には「女生徒」を「文学界」に発表し、太宰は作家として大きな成功を得ていく。

そうした時期に執筆された「葉桜と魔笛」もまた、掌編でありながら、戦略的な構造を持つ佳作である。少し長くなるが、概要を示しておきたい。

葉桜のころになれば、忘れられないあの日を思い出すと老夫人は語る。老夫人こと私は、亡くなった母に代わって父や病気の妹を支えていたが、妹は十八歳で亡くなった。老夫人が忘れられないあの日は、この頃のことである。

ある日妹は、M・Tという知らない男性から手紙が来たと私を呼び出す。私はこの言葉に憤った。なぜならその五・六日前、私はM・Tからの三十通ほどの手紙を発見し、妹とM・Tが心以上の関係で、別れの原因が妹の病気にあつたことを知っていたからだ。妹が差出人を知らないといったその手紙は、実は、妹を慰めようとM・Tを装って私が書いたものだった。しかし、この嘘を妹はすぐに見抜いた。なぜならM・Tからの手紙は全て、妹の自作自演だったからだ。時は六時、軍艦マアチの

口笛が聞こえた。M・Tを装う私の手紙にだけ記された口笛の約束。姉妹は、言い知れぬ恐怖に強く抱き合い、この出来事で私は神を信じた。その三日後に妹は亡くなった。

ここまで話した老夫人は、今は年をとり、もろもろの物慾が出て来て、信仰も少し薄らいだと語る。口笛も父の仕業ではと疑うこともあるが、やはり神様のお恵みだと語り直す。しかし安心しきれない老夫人は、再度物慾と信仰の薄らぎを語る。

こうした内容を持つ「葉桜と魔笛」は、どのように読まれてきたか。先行研究を確認しておきたい。代表的な論点は、次の五つである。「葉桜と魔笛」が教科書に採用されていたことによる教材論が一つ目、二つ目に結核をめぐるロマンチズムの問題、三つ目に他作品の影響、四つ目に家族の問題、五つ目に信仰の問題である。なかでも最後の二つ、家族と信仰の問題は、「葉桜と魔笛」の内容そのものに切り込んだものとして見逃せないが、この論点から導き出された解釈は、さらに三点にまとめることができる。

まず、「姉妹愛」という解釈である。大平剛氏が「多くの読者がこの『葉桜と魔笛』について姉妹愛を主題にした小説と読むだろう」と指摘している通り、「葉桜と魔笛」は、病気の妹とその妹を支える姉の姉妹愛が、口笛の奇跡を招いたと解釈されることが多い。次に、「信仰」にまつわる解釈である。「葉桜と魔笛」における本格的な作品論は、「信仰」にまつわる解釈から出発した。赤司道雄氏は、次のように評している。

神を信ずる、神はきつと在る、あるいは神を信じたい、こうした意味の言葉は、この昭和十三年から十四年にかけての作品「満願」、「懺悔の歌留多」、「女生徒」に色々な文脈の中で出て

くる。そして今、この小篇の中に、はっきりと、端的に表白されている。筆者には「葉桜と魔笛」は、これが言いたかった作品ではないかとさえ思える

最後に、「回想形式」に対する解釈である。早い段階でこの点に注目したのは、木村小夜氏である。氏は、老夫人の心境を「過ぎた青春への哀惜」だと結論し、同様の視点として、櫻田俊子氏の「青春期の自身への郷愁」という解釈がある。

本論では、家族という視点を重視しながら、先行研究の「姉妹愛」「信仰」「回想形式」への疑問を提示・解決しつつ、「葉桜と魔笛」を考察する。そこでは、「老夫人」が何を語り、現在どのような気持ちでいるのかが明らかになるだろう。具体的には、一・二章で「老夫人」が過去の「私」をどのように語ったかを分析し、三章では「老夫人」の妹や父像を明らかにする。そのうえで、四章で「老夫人」の現在の心境を確定していく。こうした検討を通じて、「葉桜と魔笛」の新たな解釈を示すことが本論の目標である。

### 一、犠牲者としての「私」

前述の通り、本論では「葉桜と魔笛」を《家族》という視点から考察する。この視点の有効性を示す証左として、「葉桜と魔笛」内の時間軸が、全て家族にまつわる出来事を起点としていることがあげられる。

語る現在に最も遠い過去から整理すると、「私が十三」の時に母が他界し、老夫人の語りの現在から「三十五年まえ」、「私十八、妹十六のとき」に、父の中学校長赴任に際して「島根県の日本海に沿っ

た人口二万余りの或るお城下まち」に、家族は引越した。以後赴任から「六年目」に転任するまでここに住み、妹はこの年に手紙を書き始める。そして「城下まちへ赴任して、二年目の春、私二十、妹十八」の時、妹は亡くなった。その後、「二十四の秋」に「私」は松江で結婚し、語りの現在から「十五」年前、父が亡くなる。以上のように、「老夫人」の語りは家族の出来事を起点に構成されている。

しかしこの家族物語は、美しい「私」の思いだけで語られたわけではない。もちろん、「私」は家族を大切に思い、家族に尽くし、家族のために生きてきた。しかしそれはまた、「私」の人生をないがしろにする危険をはらんでおり、先行研究でも指摘されている通り、「私」はそのことに不満を抱いている。その最たる例が、「二十四の秋」に結婚したことである。事情は、次のように語られている。

早くから母に死なれ、父は頑固一徹の学者気質で、世俗のことには、とんと、うとく、私がいなくなれば、一家の切りまわしが、まるで駄目になることが、わかっていましたので、私も、それまでにいくらか話があったのでございますが、家を捨て、まで、よそへお嫁に行く気が起らなかったのです。

つまり、家族構成と、その中で果たす役割が、「私」の結婚を許さなかったわけだが、注目すべきは「それまでにいくらか話があった」という「私」の言葉である。この言葉は、母と父の犠牲者である「私」を、さりげなくも確実に伝えている。つまり、父が「世俗のことは、とんと、うとく」、助けてくれる母もいなかったために、「私」は「当時としては、ずいぶん遅い結婚」をしたのである。

しかも、「私」が犠牲をはらった家族は、父や母だけではない。

妹もその一人だ。なぜなら「私」の妹は体が弱く、あげく「腎臓結核」に侵され、「手のほどこし様が無」くなってしまうほどの状態だったからである。こうした状況は「私」に妹の看病を強いて、ますます家のために生きることを要求した。この事態に対応しながらも、「せめて、妹さえ丈夫でございましたならば、私も、少し気楽だったのですけれども」と語ることを「老夫人」は忘れない。それは父や母に対する負の感情と同様、妹への隠された不満を露わにする。

以上のように、「老夫人」は家族を語りの中心に据え、その家族を支えながらも、犠牲になっていた「私」の不満や恨みを語りに潜ませた。それは、家族に対する裏腹な気持ちを抱えた「私」を明らかにする。

そもそも、家族への献身という意識に変わった原因は何なのか。それこそ、「私」の恋愛、ひいては結婚への欲望である。次章では、家族への裏腹な思いをこじらせ、家族と恋愛に引き裂かれていく「私」を明らかにする。

## 二、引き裂かれた「私」

一章では、「私」の語りに、家族の犠牲に対する不満が潜んでいることを明らかにした。花崎育代氏の指摘によって、再度その状況を確認しておく。

語り手の「老夫人」——「三十五年まへ」の「姉」——は、冒頭から、一三のときに母を亡くしたあと二四で結婚するまで、中学校長で「頑固一徹の学者気質」の「世俗のことには、とんと、うと」い「厳格」「厳酷の父」と、病弱の妹との三人の「一

家の切りまはし」を行なってきたと語っている。これは読者に、気丈ながら、制度や習慣や規範のなかで、あるいはそうした規範に忠実に生きてきた女性という印象をつよく与える。瀕死の「妹」のことで「一ぱいで、半狂気の有様」であっても、それはただ「ひとり」草原で「思ひ切つて泣く」のであり、読者にむしろ忍従に近い印象を与えている。

ここで、花崎氏が「制度や習慣や規範」と述べた作品発表時の価値観と、「葉桜と魔笛」が掲載された雑誌「若草」の性質を、吉野瑠璃子氏の指摘で確認しておきたい。吉野氏は「葉桜と魔笛」発表時、つまり「昭和初期を生きた女性達は〈結婚〉して良妻賢母になることを当然視され、そのために未婚女性は〈処女〉であることを期待され」ていたと指摘する。一方で、「葉桜と魔笛」が掲載された雑誌「若草」の掲載作品は、「恋愛」を描く作品が多く、「読者の投稿作品」も多い。またその読者層は「十七―二十歳の女性読者の存在を目にすることが多い」。ここから氏は、「若草」の想定読者である当時の十代後半から二十代の未婚女性が、実は〈恋愛〉への欲望を抱いていた」と述べている。さらに太宰は、この読者の傾向をふまえて「葉桜と魔笛」を執筆したと述べている。

氏の意見に賛同したうえで、「葉桜と魔笛」の「私」が同様の苦しみにいることを、作品から確認していく。つまり、恋愛に憧れながら、家族や世間体に悩まされ、身動きをとれないことへの苦しみである。

「私」が恋愛に強く憧れていたことは、「野も山も新緑」のころ、「ひとり、いろいろ考えることをしながら」「軍艦の大砲の音」を聞いて「半狂気の有様」になっている場面を解釈することで明らかに

なる。この語りの特徴は、肉体を伴う苦しみにある。ここに引用してみると、「はだかになってしまいたいほど温く」、「ひとり、いろいろ考えることをしながら帯の間に片手をそつと差しいれ」、「息ができなくなるくらい」、「身悶えしながら歩いた（傍線論者）」というものである。この特徴を押さえたうえで、なぜこのような語りになったのか、原因を考察する。

考察にあたつて、「私」がM・Tを装つて書いた手紙をいつ置いたのかを特定する必要がある。なぜならそれは、肉体の苦しみを伴う語りが、M・Tを装つた手紙の影響であるかを特定することになるからだ。結論からいえば、次の三点の理由から、外出前に「私」は手紙を置いたと考える。

まず、「私」が「軍艦の大砲の音」を聞いたその日、「ながいこと草原で」「泣きつづけて」いた「私」は、「日が暮れかけて来たころ」お寺へ帰ってくる。その「私」を、妹は手紙の件で呼び出した。このように、「私」が帰つてすぐに妹が「私」を呼び出していること、これが一つ目の理由である。二つ目に、「日が暮れかけて来たころ」「私」はお寺へ帰つたが、「夕闇の迫った薄暗い部屋の中で」妹は、「あたし、この手紙読んだの」と語る。「日が暮れかけて来たころ」と、「夕闇の迫った薄暗い部屋」という描写から、「私」の帰宅から、手紙について妹が問いただすまでの時間は、わずかなものであったことがわかる。最後に、帰宅後の「私」が、手紙に対する妹の問いかけに、「はつと、むねを突かれ、顔の血の気が無くなつ」ていることである。もし、帰宅後すぐに手紙を置いたのであれば、ここまでぎまぎすることはなかったはずだ。以上から、「私」は手紙を置いてから、「新緑がまぶし」い時間帯に「野道を歩き」、「軍艦の

大砲の音」に驚いて「草原に坐」り、「日が暮れかけ」るまで「泣きつづけて」いたと考えることができる。

ここで注意すべきは、この手紙が、妹が肉体関係を結んだであろうM・Tを装って、「私」が書いたものである点だ。つまり、「軍艦の大砲の音」を聞いた場面での肉体を伴う苦しみは、M・Tを装った手紙がひきがねだったのだ。これは、「私」の恋愛への憧れ、さらに「私」の情慾をはつきりと示していて重要である。

そしてこの情慾は、妹への〈妬み〉を引き起こす。この点について、本論ではハイダー (Heider 1958) のPOXトライアドに基づき、嫉妬ではなく、〈妬み〉という言葉を用いる。少し長くなるが、その弁別についてわかりやすく説明した澤田匡人氏の解説を引用する。<sup>(注1)</sup>

まず、自分が欲しがっている対象(X)をめぐる、自分(P)と他者(O)がいるという状況を想定してみよう。ここでは、自分ももっていない対象を他者だけがもっているため、自分も他者ももっているXをもちたいと望む。これが妬みである。一方、嫉妬では、最初から自分は望ましい対象を所有している。この場合の対象とは、自分にとって重要な人物を指すことが多いだろう。たとえば、恋人や母親がどれだけ自分に注意を注いでくれているかが問題なのだ。そんなときに、どこの馬の骨ともわからない第三者が出現し、重要な人物との既存の関係が脅かされて不安になってしまう。これが嫉妬というわけである。つまり、「自分ももっていない対象」を「もちたいと望む」ことが「妬み」、一方「最初から自分は望ましい対象を所有して」おり、それが「脅かされ」ることへの「不安」を抱くことが「嫉妬」である。

この弁別に基づけば、自らが経験したことのない肉体関係を、妹が既に結んでいたと知った「私」の感情を説明するには、〈妬み〉が適切だといえる。

ここまで妹に対する「私」の〈妬み〉を確認してきた。また、その原因が「私」の情慾にあったことも明らかにした。しかし、「軍艦の大砲の音」を聞いた日に語った「ただもう妹のことで一ぱいで、半狂気の有様」という「私」の言葉もまた、忘れてはいけない。ここから、「私」は妹への愛と妬みに心引き裂かれ、動揺しているとわかる。では、この動揺は「私」にどのような変化を与えたのか。この点についても考えておきたい。

「私」の動揺を引き起こす事態を考察するにあたって、ジグムント・フロイトの娘、アンナ・フロイトが提唱した防衛機制の理論から、投影の末に同一化に至った女性の事例を参照する。<sup>(注12)</sup>

自分の欲求を他の人びとに引き渡すというこの態度は、彼女の人生を通じて特徴的なものであり、小さな出来事の分析においてもこれが明らかにされた。たとえば、13歳の時、彼女は姉の男友だちを密かに恋した。姉はそれまではげしい嫉妬の対象だった。そのころ彼女は、彼が姉より自分の方を好きであるに違いない、だから、なにか愛の証拠を示してくれないものかと望んでいた。しかし、それまでも何度かあったことだが、ある時、自分が彼から無視されていることに気づいた。ある夜、その男は突然に姉を散歩にさそったのである。分析で彼女ははつきりと当時を想い出したのであるが、それによると、彼女は最初、失望のあまり体が麻痺してしまっただが、突然いそがしく動きはじめ、姉の準備を熱心に助け、姉の外出のため、姉をき

れいに、着飾らせようと働いた。こうしながら、彼女はこうもえなく幸せで、外出して楽しむのが自分ではなくて、彼女の姉であるということも全く忘れていたほどであった。彼女は自分の愛の願いや賞賛への望みをライバルに投影した。嫉妬の対象である姉と同一化することによって、彼女自身の欲望も満足させたわけである。

つまり、「失望のあまり体が麻痺してしまった」女性が、「自分の愛の願いや賞賛への望みをライバルに投影」することで「嫉妬の対象である姉と同一化」し、「彼女自身の欲望も満足させた」のである。この事例は、「私」の心理を考えるにあたっても、示唆を与えてくれる。つまり、M・Tを装って「私」が手紙を書いたことは、「同一化」という防衛機制の理論で解釈できるのではないか。

「私」が手紙を書いた事情を、振り返っておこう。「私」は、「妹の簞笥をそとと整理し」た時に、「ひとつの引き出しの奥底に、一束の手紙が、緑のリボンできっちり結ばれて隠されて在るのを発見」し、盗み見る。「およそ三十通ほどの手紙」は、「M・T」という「その城下まちに住む、まずしい歌人」らしい人と妹との恋文で、この恋文を「一通ずつ日附にしたがって読んでゆくにつれて」、初めこそ「あの厳格な父に知れたら、どんなことになるだろう、と身震いするほどおそろしく」感じていた「私」も、「なんだか楽しく浮き浮きして来」る。「おしまいには自分自身にさえ、広い大きな世界がひらけて来るような気」さえしていた「私」だったが、その気分は「去年の秋の、最後の一通の手紙を、読みかけて」一変する。「私」は「雷電に打たれた」かのように感じ、「のけぞるほどに、ぎょっと」した。なぜなら「妹たちの恋愛は、心だけのものではな」く、

「もつと醜くすすんでいた」からである。そのうえ妹が捨てられた原因は、「妹の病氣」にあった。

「若い女としての口には言えぬ苦しみも、いろいろ」抱えた「私」が、妹とM・Tの肉体関係に動揺していることがわかる。そしてこの動揺は、先ほどの事例のように、「同一化」を引き起こす。その様子は、手紙を「一通のこらず、焼」き、妹を思つて煩悶する「私」の語りに明らかである。

その事実を知ってしまったてからは、なおのこと妹が可哀そうで、いろいろ奇怪な空想も浮んで、私自身、胸がうずくような、甘酸っぱい、それは、いやな切ない思いで、あのような苦しみは、年ごろの女のひとでなければ、わからない、生地獄でございませう。まるで、私が自身で、そんな憂き目に逢つたかのように、私は、ひとりで苦しんでおりました。あのころは、私自身も、ほんとに、少し、おかしかつたのでございます。

こうして、「私」はM・Tを装って手紙を書く。これまであまり指摘されなかったが、M・Tを装って書いた「私」の手紙が、妹を思う気持ちだけでなく、妹に同一化した「私」自身を癒していたことは、姉妹愛という解釈に疑問を呈していて重要である。より詳しく手紙を解釈していく。

「私」がM・Tを装って書いた手紙は、つまるところ結婚に主眼がある。その手紙には、病気に苦しむあなたを「どうしてあげることもできない」かつたがゆえに別れたが、あなたを愛する気持ちからもう逃げないというM・Tの気持ちが綴られており、そのうえで、「きつと、美しい結婚できます」と、「結婚」へと結実していく。しかし、死を前にした妹は、結婚を望んでいたのか。ここで、妹の語っ

た慾望を確認しておきたい。「葉桜と魔笛」の中でも、特に印象深い場面である。

ひとりで、自分あての手紙なんか書いてるなんて、汚い。あさましい。ばかだ。あたしは、ほんとうに男のかたと、うんと大胆に遊べば、よかった。あたしのからだを、しっかりと抱いてもらいたかった。姉さん、あたしは今までいちども、恋人どころか、よその男のかたと話してみたこともなかった。姉さんだつて、そうなのね。姉さん、あたしたち間違つていた。お伶俐すぎた。ああ、死ぬなんて、いやだ。あたしの手が、指先が、髪が……………可哀そう。死ぬなんて、いやだ。いやだ。

この言葉には、男性と関係を持てなかつた後悔がにじみ出ている。そこには当然、死の影がある。だからこそ妹の望みは、当時の道徳にそつた女性像、つまり結婚して子供を産み育てるというものではなく、「あたしのからだを、しっかりと抱いて」ほしいという願望にとどまつているのである。

妹の死の時が迫っていることを知っている「私」は、妹の告白なくしても、この願望を読み取ることができたはずである。つまり、死を前にした妹には、結婚よりも切実な願いがあることを、妹を思つてさえいれば「私」は察することができた。ここから、この手紙は妹を思つて書かれたものというより、「私」の願望を投影したものであり、妹に同一化した自分の欲望を満たすために書かれた手紙だつたと考えることができる。

ここまで検討した点をまとめておく。「私」は家族に対して、裏腹な気持ちを抱いていた。それは、家族を大切にする気持ちと、恋愛ができないことへの不満や恨みの気持ちである。情慾に基づいた

この裏腹な思いは、M・Tの手紙が発覚したことによって、妹への妬みを引き起こす。ここから生まれた動揺を、「私」は妹に同一化することで癒そうとした。こうした混乱の最中に聞こえたのが口笛であり、この口笛によって「私」は「神さま」を信じ、医者が「首をかしげ」る妹の死さえも受け入れてしまう。

このように一・二章では、「老夫人」が「私」をどう語つたのかを検討し、そこでは、家族への思いと情慾に引き裂かれる「私」を明らかにした。次章では、「老夫人」が妹と父をどのように捉えているかを確認し、揺れる「老夫人」を明らかにしていきたい。

### 三、揺れる「老夫人」

「葉桜と魔笛」の語りは、老夫人が過去を回想することに特徴がある。「老夫人」の現在の心境がわかる、作品末尾を引用する。

いまは、——年とつて、もろもろの物慾が出て来て、お恥かしゅうございます。信仰とやらも少し薄らいでまいつたのでございましょうか、あの口笛も、ひよつとしたら、父の仕業ではなかつたろうかと、なんだかそんな疑いを持つこともございマス。学校のおつとめからお帰りになつて、隣りのお部屋で、私たちの話を立ち聞きして、ふびんに思い、嚴酷の父としては一世一代の狂言したのではなからうか、と思うことも、ございマスが、まさか、そんなこともないでしょうね。父が在世中なれば、問いたですこともできるのですが、父がなくなつて、もう、かれこれ十五年にもなりますものね。いや、やつぱり神さまのお恵みでございましょう。

私は、そう信じて安心してやりたいのでございますけれども、どうも、年とつて来ると、物慾が起り、信仰も薄らいでまいて、お恥ずかしゅう存じます。

このように「老夫人」は、「物慾が出て来て」「信仰とやらも少し薄らい」だと語った後、口笛が「父の仕業」だったかもしれないと続ける。いや「神さまのお恵み」だと思ひ直したのも束の間、やはり「信じ」られないと語り、「物慾が起り、信仰も薄らいでまいて、お恥ずかしゅう存じます」と語りを結ぶ。この語りは、なぜ必要だったのか。疑問を解決するために、まず「私」が妹と父をどのように捉えていたかを確認していく。

妹については、「私に似ないで、たいへん美しく、髪も長く、とてもよくできる、可愛い子」だと「老夫人」は語っている。この語りからは、優れた妹という「私」の認識と、自分の方が劣っていると考えている「私」が読みとれる。また、「自分でも、うすうす、もうそんなに永くないことを知つて来ている様子で、以前のようにな、あまり何かと私に無理難題いつけて甘つたれるようなことが、なくなつてしま」つた時に、妹は「夕闇の迫つた薄暗い部屋の中で、白く美しく笑つて」「私」が手紙を書いたことを見抜く。そして、「姉さん、心配なさらなくても、いいのよ。」と「不思議に落ちついて、崇高なくらいに美しく微笑」する。こうした「老夫人」の語りからは、神に近い、崇高な存在として妹を語り出す意図が感じられる。

一方、父はどうか。妹に比べ、父をめぐる語りは少ないが、「頑固一徹の学者気質」で、「世俗のことには、とんと、うと」い「中学校長」として、果ては「厳格」「厳酷の父」と語られている。

このように、「私」が「崇高」な妹と「厳酷」の父として、妹と父を捉えていたことを、「老夫人」は語り出す。この家族像を一変させる機能を果たしているのが、末尾の「老夫人」の語りだったのではないか。

前述の通り、「私」は結婚し、年月を経て「老夫人」となった。その今、「物慾が起り、信仰も薄らい」だと語っている。ここで「老夫人」が「信仰」の薄らぎを語ったことは重要である。なぜなら、「私」が「崇高」という言葉で語った妹像に、変化が生じるからだ。それはつまり、妹の死を「神さまのおぼしめし」と信じていた「私」に変革を迫り、そのことで蓋をしていた妹の苦しみや情慾に、「老夫人」が真正面から向き合おうとしていることを表している。また、父は口笛を吹いた可能性を末尾で与えられたが、これもまた、「厳酷の父」から人間味のある父であった可能性を、「老夫人」が提示したといえる。つまり、「老夫人」となった今、かつての家族像に変化が生じたことを、作品末尾の語りが教えてくれるのである。

記憶の意味付けを変えることは、過去を乗り越えることに寄与する。その際、語り直しが有効であるという研究がある。高橋雅延氏は、「記憶そのものは消せなくとも、その辛さを和らげることは可能」であり、いくつかの考えられる方法の中でも「おそらく、もっともよい方法は、その記憶の意味づけを変えることだろう」と述べている。「意味づけを変える」方法として、具体的に次の方法をあげている。

ある過去のできごとについてその意味づけを変えるためには、そのできごとを、それまでとはちがうことばで語り直さなければならぬ。世間には「時間が癒す」という言いまわしがある。



ここで、見過ごされがちなことだが、「時間が癒す」のは、単に時間が過ぎ去るからではない。時間が過ぎ去る間に、人はそのできごとについて何度も考え、悩み、さらには新しい経験をする。このことによって、元のできごとの意味づけ、語りかたが変わるからだ。

「老夫人」もこのように、妹や父にまつわる過去を語り直すことで意味付けを変えようとしたのではないか。ジョン・H・ハーヴェイ氏は、「親しい人との死別によって生じる喪失の悲しみをどのように癒やしたらよいか」という問題に、「愛する人について想いを巡らしその物語を他者に話すことの価値を再び強調しておきたい——シェイクスピアの言葉を借りれば『悲しみに言葉を与える』ことが重要」なのだと述べている。<sup>(注14)</sup> さらにこうも指摘している。

重大な喪失には、しばしば罪悪感がともなう。自分の行為が喪失に関連していなくても、人は「生き残った者の罪悪感」を感じることがある。<sup>(中略)</sup>

結局、愛する人の死後に生じる罪悪感を処理するためには、自分自身をその責任から解き放つてやらねばならない。その死とは何ら関係がないことを理解しなければならぬのだ。私たちは悪い出来事が起こることを常に防げるわけではない。このことを理解する必要がある。

以上のように、作品末尾の語りには、語り直しによって得た、記憶の意味付けの結果が表れている。それは、かつて「私」が抱いていた家族像を変容させ、そのことで「老夫人」は妹と父の死を受け入れようとしている。しかしそれはまた、一・二章で確認した通り、情慾に翻弄されて家族に向き合わなかった「私」を許すことでもあ

る。だからこそ「老夫人」は語りの最後で、いまだ揺れる不安を語ったのである。

#### 四、「老夫人」の〈強さ〉

ここで、序で確認した家族・信仰にまつわる解釈を確認しておく。まず、〈姉妹愛〉という解釈だが、二章で述べた通り、妹に同一化することで自らの欲望を癒した「私」を思うと、単に姉妹愛で作品を解釈するわけにはいかない。それは、「老夫人」の苦悩を軽視することにもなるからである。

次に、〈信仰〉もまた、主題だとは言い難い。「神を信ずる」<sup>(注15)</sup>ことが主題であるならば、信仰の薄らぎはなぜ語られたのか。「葉桜と魔笛」の語りは、むしろ神を信じられないことに端を発しており、そのことに意味がある。

最後に、〈回想形式〉に対する解釈である。先行研究においても、回想形式を無視した解釈は少なくない。姉妹愛や信仰という解釈もそれに違わない。しかし、回想形式を無視しては、「葉桜と魔笛」を真に解釈したとはいえない。この形式に意味を与えた二つの論を検討しておく。

木村小夜氏は、次のように述べている。<sup>(注16)</sup>

語り手にあつては、「いま」では既に失われてしまった悩み、人知れず抱えねばならない苦しみや迷いの只中にいた未熟さこそが、純粹な自らの青春の証だったのであり、また語り手の言う「信仰」とは、そうした迷いや苦しみの中からこそ生じるものであったのではないか。それを失ったこと、つまり過ぎた青

春への哀惜としてこの話は語られたのである。

さらに父については、次のように言及している。

母がおらず「厳酷」の父だけの家庭であったことで、自分の結婚や妹の病気の発見が遅れたというふうにかつて意識していたとしても、或いはその思いが語りの初めにはまだあったとしても、それでも姉はこの語りを経るることによって、そうしたこだわりを浄化させ、今は死者となった父のことを思い出すことが出来るようになったわけである。但し、この一連の最後の部分を見る限り、語り手はそのようにはつきりと父への感情の変化を自覚してはいないようである。

このように論じた木村氏は、「三十五年まへ」と『いま』の意識の落差が示されることで、語り手自身の成長は語られた」と結論する。

また、櫻田俊子氏は、次のように解している。

家族の形が、年を経るに従い、様々な形に変化するのとは、自然のことであるが、語り手の「私」が語っている現在時において、家族内において生存しているのは自身だけである。青春期の多感だった頃、また、「私」が回想で語られた時期の後に結婚したことを鑑みれば、家庭内において、娘でいられた最後の時期の自身、その若さそのものの、青春期の自身への郷愁でもある。

そして、家庭内の中で、自身の青春期の「口には言へぬ苦しみ」を抱えながら、妹や父に対し、「一家の切りまわし」——母や妻の役割——を担っていたことに対する郷愁である。作品は、もう存在しないある時期の一つの家族の物語でもある。

つまり櫻田氏は、「青春期の自身への郷愁」・「一家の切りまわし」——母や妻の役割——を担っていたことに対する郷愁」が作品の意

味だと解釈している。

このように回想形式の意味は、「青春への哀惜」や「郷愁」にあり、過去を相対化することに求められてきた。確かに「老夫人」は、過去を相対化することに成功している。しかしだからといって、「青春への哀惜」や「郷愁」に直裁に結びつけることはできない。なぜなら三章で述べた通り、相対化がむしろ、妹や父の思いを浮き上がらせ、「老夫人」を苦しめているからだ。妹に自分がしてあげられることはなかったのか、父も大変だったのではないか。「老夫人」の末尾の語りには、そうした不安が表れている。つまり、「哀惜」や「郷愁」という言葉で片付けられるほど、「老夫人」はまだ過去を客観視できていないのである。

ここまで、〈姉妹愛〉〈信仰〉〈回想形式〉という、家族・信仰にまつわる先行研究の切り口を確認してきたが、これらの解釈に共通するのは〈ロマンチズム〉である。姉妹に愛を見ようとするロマンチズム、信じることは美しいというロマンチズム、思い出は美しいというロマンチズム。しかし「老夫人」は、もつとリアリスティックに過去に向き合っている。ここで確認しておくべきは、「老夫人」が語る現在である。そこには常に〈死〉がつきまとう。

「葉桜と魔笛」の時代背景には、いつも戦争がある。「私」は、妹が亡くなった年を、「東郷提督の命令一下で、露国のバルチック艦隊を一举に撃滅なさるための、大激戦の最中だった」と語っている。ここである「大激戦」は、「東郷提督の命令一下で、露国のバルチック艦隊を一举に撃滅なさるため」とあることから、日露戦争のさなかである。つまり、妹の死は一九〇五（明治三十八）年で、一九〇五年に「私」は「二十」だったといえる。ここから逆算し、

私一八歳は一九〇三(明治三十六)年であり、さらにそれから「三十五年」が経過したのが語りの現在であることから、語りの現在は一九三九(昭和十四)年、「老夫人」は五十四歳位だと特定できる。<sup>(注8)</sup>これは、語りの現在が日中戦争のさなかにあり、第二次世界大戦が迫っていたことを意味する。

また、寿命もそうである。当時の平均寿命を、厚生労働統計協会発行の「平成24年簡易生命表」、「付録Ⅱ 第1回〜第21回生命表(平均余命)」から確認すると、該当するのは、調査「第6回」にあたる「昭和10年度」になり、この回の「女」の平均寿命は「49・63」年である。<sup>(注9)</sup>つまり、五十四歳の「老夫人」は、「老」という言葉に違わず、いつ死が訪れてもおかしくない状況にある。これらから、「老夫人」にとって死は常に意識されるものとわかる。それでもなお「老夫人」は、過去を見つめ続けたのである。

時を経ることで、時代も、「私」の状況も変わった。「私」は結婚して、「老夫人」となったが、葉桜の季節に起こった口笛の出来事は、その間変わらずに、印象深い人生の一場面であり続けた。だからこそ「葉桜のころに」「きつと思ひ出し」てきたが、年をとって「物慾が起り、信仰も薄ら」いでくると、それは「老夫人」にとって、だんだん美しい過去という形を取れなくなってきた。なぜなら「信仰」が薄らぐことは、妹の死や口笛の解釈に対する疑惑を招くからである。こうした疑惑が、やがて〈宿痾〉つまり持病のようになってた。

人は誰しも、自分の過ちに気付きたくはない。疑惑を伴う過去にロマンチズムで蓋をし、気付けぬふりをすることもできる。ましてや、誤解を伴う相手は死者であり、事態が変化することもない。

しかし「老夫人」は自らの死を前にしても、逃げずに過去を語り、そうすることで妹や父に真正面から向き合い、家族の死を自分の努力で受け入れようとした。それはかつての自分を許してよいのかという新たな問いを生んだが、死を前にしてもロマンチズムに身を寄せず、〈宿痾〉に向き合おうとしたことに意味がある。これこそが「老夫人」の持つ〈強さ〉であり、作品の主題でもある。

## おわりに

ここまで述べたことを整理して、本稿を閉じたい。

「葉桜と魔笛」は、老夫人が「私」だったころを回想する小説である。「私」は家族のために生きる一方で、自身の恋愛がおろそかになることに不満や恨みを抱いていた。この情慾に基づいた犠牲の思いは、M・Tとの手紙の一件で、妹への妬みを引き起こし、さらに混乱をきたす。

時を経て「私」は「老夫人」となり、「物慾が起り、信仰も薄ら」ぐ。この心境の変化は、「崇高」な妹、「厳酷」な父像を変容させた一方で、かつての自分を許せるかという問いを呼び起こし、「老夫人」ははまだ揺れ続けている。

年を取ったからといって、人は成長し、出来事が風化するとは限らない。むしろ、高揚した気持ちの時が冷まし、疑惑がうまれ、〈宿痾〉となることは少なくない。しかし「老夫人」は、死を前にしても、ロマンチズムに浸ることなく、安易に父や妹、そして自分の思いを片付けることなく、正直に過去を見つめようとした。自ら納得できるまで〈宿痾〉に向き合う「老夫人」の〈強さ〉こそ、「葉

桜と魔笛」の価値を確かなものにしており、ここに太宰の温かな眼差しが向けられている。

## 注

- 1 太宰治『太宰治全集第二巻』（一九八九年八月二十五日、筑摩書房）
- 2 太宰治『太宰治全集第十一巻』（一九九一年三月二十日、筑摩書房）
- 3 山内祥史『太宰治の年譜』（二〇一二年十二月二十日、大修館書店）
- 4 大平剛「太宰治『葉桜と魔笛』論」帯広大谷短期大学紀要委員会編『帯広大谷短期大学紀要 第四十四号』（二〇〇七年三月三十一日、帯広大谷短期大学）
- 5、15 赤司道雄「『懶惰の歌留多』、『女生徒』、『葉桜と魔笛』——神は在る、信仰少しずつ分つて来る」赤司道雄『太宰治——その心の遍歴と聖書』（一九八五年十一月二十日、八木書店）
- 6、16 木村小夜「太宰治『葉桜と魔笛』論」奈良女子大学文学部國語國文学研究室編『叙説 第十七号』（一九九〇年十月一日、奈良女子大学文学部國語國文学研究室）
- 7、17 櫻田俊子「太宰治『葉桜と魔笛』論——自己充足としての創作と父への郷愁の物語」『郷土作家研究三十五号』（二〇一二年三月、弘前・青森県郷土作家研究会）
- 8、18 三谷憲正『葉桜と魔笛』評釈（一）山内祥史編『太宰

治研究16』（二〇〇八年六月一九日、和泉書院）参照。

- 9 花崎育代「『葉桜と魔笛』論——ロマネスクの外／追想の家族——」山内祥史編『太宰治研究4』（一九九七年七月二十五日、和泉書院）
- 10 吉野瑠璃子「太宰治の女性独白体研究——彼女達は何者なのか——」『國文第百十九号』（二〇一三年七月、お茶の水女子大学國語国文学会）
- 11 澤田匡人「なぜ人は嫉妬するのか？」永房典之編『なぜ人は他者が気になるのか——人間関係の心理』（二〇〇八年九月三十日、金子書房）
- 12 牧田清志・黒丸正四郎監修、黒丸正四郎・中野良平訳『自我と防衛機制 アンナ・フロイト著作集 第2巻』（一九八二年六月十七日、岩崎学術出版社）の「第三部 防衛の2つのタイプ 第10章 利他主義の形式」より引用。引用に際して、読点は「、」に統一した。
- 13 高橋雅延「変えてみよう！ 記憶とのつきあいかた」（二〇一一年四月二十二日、岩波書店）の「[3]忘れたいのに、忘れられない——嫌な記憶はなくせるか」中の「万能薬としての『語り直し』」
- 14 ジョン・H・ハーヴェイ著・安藤清志監訳『悲しみに言葉を——喪失とトラウマの心理学』（二〇〇二年十一月八日、誠信書房）の「第3章 親しい人の死による喪失」中の「癒やしへの歩み——悲しみに言葉を」
- 19 厚生労働省大臣官房統計情報部編『平成24年簡易生命表』（二〇一三年十月十八日、一般財団法人 厚生労働統計協会）

※「葉校と魔笛」本文は、太宰治『太宰治全集第二卷』（一九八九年八月二十五日、筑摩書房）によった。

ただし、旧字は新字に改めた。

※各引用に際して、ルビは適宜省略した。

（やまだ・かな 本学大学院博士後期課程）